

幼児期の 創造性を培う教育

恩 田 彰

1 創造性について

私たちの社会は、多くの人たちの創造活動によって進歩をとってきた。もちろんこれには天才の創造力に負うところが少なくないが、これを支える大衆の創造力も無視できない。

創造活動はただ少数の科学者、発明家、芸術家などの特殊な人たちに限らるべきものではなく、私たちの日常生活の中にも、しばしば見出されるものである。

私たちは日常生活において、単に同じことを繰り返しているだけでなく、しばしば新しい事態に直面し、そのたびごとに創造性を発揮しているのである。

創造性とは、日常生活の中に生ずる新しい状況に適應していく人の人格の一特性であって、人間が生まれた時、すでにそな

わっているものである。

そこでこの創造性をいかにのばしてゆくかが、私たちの大きな課題である。

2 素質と環境

創造性は、素質的なものであるというよりも、環境によって形成される人格の一特性であると考えられる。これは環境によって、大いに開発されるものである。人間の一生の過程において、創造性は幼いうちから発現し、しかも老年期になっても衰えない人間の特性なのである。特に創造性の発現の著しい時期は、幼児期と青年期及び成人期である。

創造性についての今までの研究によれば、創造性はいわゆる知能とはちがった性質をもっていることがわかってきた。これ

は幼児期では、はっきりわからないが、青年期以上では、知能が普通以上であれば、知能の高いものが、必ずしも創造性が高いとは限らないということがわかってきた。つまり頭のよさは知能検査だけでは測定できないことがわかってきた。もう一つの頭のよさを示す創造性は、創造性テストによって測定することができるのである。

従来の教育が、知能に関係の深い知的発達をめざしてきたが、この幼児期に発現してくる創造性を小学校以上の教育は、必ずしも伸ばしているとはいえないということである。むしろ抑えてきた面が多分に強いのである。

創造性を開発する創造的環境というのは、子どもが創造者、創造活動や創造物にふれる機会が豊かであり、指導者のあたたかい愛情と適度のしつけ、ならびに指導者及び仲間相互の賞讃と激励によって創造活動に参加する機会にめぐまれている環境である。

3 教育活動は創造活動である

子どもの創造性を育てるためには、親や教師が創造的であればならない。

教育活動には予想される面と予想しえない面とがある。この全く予想しえないところに創造活動が展開する。

たとえばある幼稚園の先生は、次のようにのべている。

「シグナルさんという歌唱指導をしていましたが、二回目の前奏の時、誰かがピーピーといいました。するとあちこちでピーだの、ガッタンだの、たちまちのうちに汽笛、汽車の音でにぎやかになりました。それからその日はシグナルの歌唱指導だけの予定でしたが、変更して、ホールにつれてゆき、シグナルになるもの、上り急行列車、下り列車、トンネルになるもの、鉄橋になるものなどで遊びましたが、子どもはいろいろと次から次へと考えだしてゆくものだと感心しました。」

このようにカリキュラムをたてて指導してゆく場合にも、予想できない事態が起きるものである。その場合それを創造的に展開していくことが大切である。また教育活動は指導者と子どもとの相互作用による創造活動であると考えることができる。

指導者にとって、その創造活動に直面した時、そのすばらしさに驚き、感激することが少なくない。子どもの中に人間の本能を見出し、思わず子どもに敬意を表したい気持ちが起こることがある。子どもの心の奥にピカピカと光っているものがあるが、これは神性とか仏性とかいわれるものであるが、これが創造性の本体ではないかと思う。

4 新しい経験の欲求

創造活動に関連のある動機として、「新しい経験の欲求」がある。これは奇好奇心とよばれるもので、幼児期において強くあらわれる欲求である。

乳幼児期の活動を見ると、引出し、押入れ、目につくもの、耳に聞こえるもの、手にふれるもの、何でも興味や好奇心をもって探索しはじめると、これがやがて知識の探求、芸術の創作へと成長していくのである。

子どもは全力を傾けて、未知の世界を探索している。これが子どもの行動を創造的なものにしていく。しかし子どもが教育を受けるようになると、物事を不思議に思わなくなり、驚かなくなる。その点小さいうちに何でも教えこもうとすることには問題がある。何でもわかり満足しては、進歩がないのである。科学者は普通の人が何とも思わない、別に驚くこともないことに驚き、疑問を持つのである。そこで子どもの疑問を馬鹿にしたり、抑えたり、答をこまかしてはいけない。

子どもを、知識の豊富さを誇る、驚く能力を失った人間に育てるよりも、探索欲のさかんな、驚く能力をもった人間に育てたいものだ。

5 注意集中

注意集中とは、ある活動に一生けん命にとり組むことである

が、これが創造活動におけるイルミネーション（解明）またはインスピレーション（靈感）を引き起こすことが少なくない。子どもの注意集中力は、おとなとくらべて低い。幼児の場合おもしろいものに心をひかれるという注意は長く続くが、努力して物事に注意を集中する能力はまだ低い。

そこで子どもに注意集中力をつけるには、好きなことをやらせるのがよい。また日常生活の中で、短時間一定の規則や制限のもとに何かをやらせ、それを習慣化することも大切である。

6 広い経験

創造活動には、一般的に広い知識と経験と、深い専門的な知識と技術の両方が必要である。そこで幼児期から、この子を何にしようかと親がきめてしまつて、早く小さな専門家に育てようとすることは、必ずしも賢明とはいえない。才能の中には小さいうちから、あらわれてくるものと、後になってきまつてくるものがある。音楽や美術やダンスなどの感覚的・運動的な才能は早くから訓練してゆくことが大切であるが、文学とか科学とか知的活動の訓練は、広い経験が必要で、その専門化は遅くなる傾向がある。

現在科学技術が日進月歩しており、今日予想した人間像では将来通用しなくなるかもしれない。原則としては、どんな環境

にも適応してゆける能力、これは創造的人間の一大特徴であるが、こういう能力をもった人間が望まれているのである。

子どもにはおとなになっては体験できない、貴重な経験があるはずだ。これは是非体験させておきたい。自分の心身でありのままに経験したことが、創造活動の基礎となるのである。

したがって幼い頃には、できるだけ片方にならないように、幅広く、多方面な活動をさせ、小さく型にはまらないようにすることが大切である。

7 自発性の訓練

創造活動は自発性に基づいているが、その場合適切性をもった自発性から生まれる。つまり自発性に基づく活動が、ある程度方向づけられ、適度に訓練された時、はじめて創造的になるのである。

子どもの活動は、多くは自発性に基づいている。しかし場合によっては、自発性を欠くこともある。そこでこれを引き出すために、子どもに自分の気持ちを表出させるのである。それには自由に物をつくらせたり、描かせたり、話させたり、好きなおもちゃで遊ばせたりして、子どものやりたいことをやらせるのである。子どもの遊戯療法では、こういうやり方をとっている。

そこで子どもの思ったこと、感じたことを自由に表出させ、

これを受容することが必要である。創造活動は、本当の自己の経験から生まれる。このような素朴な経験が、創造活動の基礎となっているのである。

もちろん感情を表出させるだけでは、指導にはならない。表出によって自発性を高めるとともに、適切な表出の仕方、つまり表現の仕方を学ばせるのである。絵を描く場合でも、楽器を演奏する場合でも、とりきめや基礎的な知識や技術の習得や活動の条件づけが必要だ。これをしっかりと教えてゆくことが大切だ。

絵が描けないでいる子が、先生や友だちとおもしろく話し合いをすることによって、イメージがはっきりし、描きたい意欲もわいてきて、描きはじめる場合が少なくない。その点絵を描く場合、コハトの機能が重要な働きをしていることがわかる。

8 第一反抗期

幼児期は第一反抗期ともいわれる。この時期は、自己主張が強くあらわれる時期である。これは人間の意志の発現にとっても、また自己実現傾向の芽ばえとしても重要な時期である。この時期の反抗をどのように処理してゆくかは、創造性を養うのに意味がある。これをどのようにして建設的な方向へ導いてゆくかが問題になる。反抗は必ずしも子どもにとってマイナスに

なることではない。社会に順応するだけでは、創造活動は生まれない。社会に固定化されているもの、概念化されているものを打ち破ってこそ、独創的なものが生まれる。このことは科学者や芸術家などに等しく認められる傾向である。子どもの反抗を、おとなから見て困ったことと考えたり、抑えたりしない、これを生産的に方向づけてゆくことが極めて大切である。

9 個人的創造性と集団的創造性

創造活動には、個人的なものがあると同時に集団的なものがある。創造活動には個人の創造力によるものが多いが、これに劣らず集団によって行なわれたものも少なくない。

科学技術の進歩や芸術活動も、人間の協同によって生まれてきた。これからの創造活動には、他人との協力の必要から、協調性を是非養っておきたい。研究所の科学技術者は、口をそろえて協調性の必要性を強調している。

創造性には、個人的創造性と集団的創造性とがある。創造性はふつう個人的なものと考えられているが、集団も創造活動を生み出すのである。これは個人ではえられない性質のものである。これは科学技術や芸術の分野などに見出される。また子どもの集団生活の中にもとらえることができる。共同的な絵画製作や図工、集団演奏の中にも見られる。また子どもたちの中で

創られてゆく道徳も、一種の集団的創造活動にほかならない。

10 しつけと自由

生活に必要な知識と技術を身につけることは、生活を営むに必要であるばかりでなく、自由に行動させることにもなる。たとえばいろいろな材料や道具を使うことにより、材料の性質や道具の機能とその取り扱い方を学ぶことになり、これらの経験が創造活動を容易にする。

また創造活動は、子どもの自由な遊びの中に生まれることが多い。遊びの中に子どもは次のような姿があらわれてくるものだ。

ある幼稚園の先生は次のように書いている。「リズムでキリンを表現するにしても、手を長く首のようにのびして表現する子、少しでも高く見せようと背のびして歩く子、手首を曲げてキリンが上の方を見回している様子を、いろいろです。それでいいのだと思います。その子がどこかで見たキリンを、その子なりに表現しているのですから、大切にしてあげるべきだと思えます。」と。

11 純粹な経験

乳幼児は触れたり、見たり、聞いたりして、外的世界を認識する。また同時にこの外的世界に接触することによって、自我

を形成しはじめる。まず親の愛情と母性によって成長する。また遊び仲間の接触によって自我が強化する。

このように人間は感覚器官を通して外的世界像を形成するにつれて、内的な自我は、ますます外的世界の法則や秩序に適応することを学習するようになる。

とくに幼児期は、外的世界に魅力を感じ、活発に探索をはじめめる頃である。この時期の自分の感覚や運動を通しての経験が、創造活動にとって大切なのである。そこでこの時期に既成概念にとらわれない、ナマの体験による認識を素直に育てたいものである。幼児期に情操教育が重視されているのも、このような純粋な経験の重要性を意味しているものと考えられる。

12 問題に対する感受性

創造性にとって大切な特徴は「問題に対する感受性」である。創造活動にとって与えられた問題を解決する能力も大事だが、それとともに問題を発見する能力も大切である。この問題を見つける傾向は、幼児期に盛んである。「これはなぜ」、「どうして」とおとなを困らせるような質問をする。そこで創造性をのばすには、このような質問に子どもが理解し、満足するような解答をしてやるだけでなく、いい質問をした時は「それはいい質問だ」とほめてやろう。そして面倒がらずに、答えてやるとともに、時にはすぐ答えずに、いっしょに考えてやることもいいことだ。

13 緊張と弛緩

人間は常に緊張し続けては、心身をこわしてしまふ。適当な休息が必要だ。とくに子どもは緊張は長く続かない。気分も変りやすい。子どもにとって、いつも「しっかりしなさい」、「それではだめだ」といわれては、気持の休まる時はない。どこか逃げ道をさがしたり、緊張しすぎたりして物事に注意が集中できなくなる。日常生活の活動がスムーズにゆくためには、緊張しすぎても、弛緩しすぎてもいけない。創造活動は、むしろ緊張と弛緩のバランスのとれた時に生ずる。アイデアは緊張から弛緩に移るさい生まれることが多い。そこで生活に緊張と弛緩のリズムを利用するとよい。そのために子どもにはしっかりやる時と、ゆっくり自由にやらせる時とけじめをつける習慣をつけてやりたい。

14 可能性の実現

創造性を開発することは、その人のもつ可能性を表現させてやることだ。その点精薄児や不具児童に対する特殊教育にその積極的意図がうかがわれる。というのはかれらのもつ残存能力

と限定された可能性を最大限に發揮することに教育の目標がおかれていくからだ。

この考え方は正常児教育にもあてはまる。なお今後対策をたてるべきは優秀児の教育の問題である。優秀児はとかく放り出されているか、その才能の發現を抑えるような環境におかれている。

人間は自分の可能性をどの程度發揮しているであろうか。人によってもちがうが、一般には60%ぐらいではなからうか。そう考えた場合私たちは子どもの可能性の実現に、どれだけのことをしているであろうか。あるいは妨げてはいないだろうか。

創造性の開發は、創造性の發現を阻害する条件を除いてやればよい。この見方からすると、私たちには子どもにしてやるべきことがたくさんあるはずである。

15 素直さ

幼児のもつ重要な特徴は素直さということだ。子どもは見たまま、感じたままに活動し、ごまかさない。

よく素直な子どもとは、親や先生の命令や指示によく服従する子どもだといわれるが、必ずしもそうではない。時にはそれに逆らう場合の方が素直なのである。この面はおとなが子どもに大いに学ぶ必要がある。アンデルセン童話の「裸の王様」に

出てくる子どもの眼を信じたい。おとなになるにつれて、この素直さがなくなっていくことが多い。そのことに気づくのが、いわゆる禪という悟りである。この素直さはおとなが子どもに押しつけるものではなくて、おとなが子どもから学ぶ性質のものである。

16 創造活動の評価

多面的な物の見方（これもよし、あれもよしと多方面に価値を認める見方）が、創造活動を促進する。二值的、対立的な物の見方（これはよいが、それはいけないと対立的にしか価値を認めない見方）は、むしろ創造活動を抑制する。子どもがやることに對して、おとなのたてた基準に基づいて、自分の思った通りにすればよし、そうでなければ許さない態度では、子どもは創造活動を抑えることになる。その状況によっては、おとなが予想しなかったことで、子どもが適切な行動をとることも少なくない。こんな時子どもの活動が、創造的で、それを評価する親や教師のほうが、創造的でないこともある。それほど創造活動の評価は難しいものである。創造活動を何を基準として評価したらよいか、これは今後大いに研究を要する問題である。

（東洋大学教授・心理学）